〝金色の戦士〟を撃退せよ！

仙豆

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはアインズ・ウール・ゴウン黄金期の物語――

ある日、パンドラズ・アクターがアインズの元を訪れる。彼の手にはオレンジ色に輝くボール。それを見た瞬間、アインズは深い郷愁に駆られた。

全盛期のアインズ・ウール・ゴウンが期間限定世界級クエストに挑む！

目次

Prologue ―― 1
オッス！　オラ悟空 ―― 3
2 ―― 10

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

「アインズ様、パンドラズ・アクター様が面会を求めております」
「ん？　　……構わん、通せ」
　ある日の昼下がり、ナザリック地下大墳墓、執務室にて。そろそろ皆に昼休憩でもと思っていた頃、唐突に訪れた来訪者。側に控えるアルベドと視線を交わすが被りを振られた。守護者統括である彼女も何も聞いてないらしい。一般メイド、シクススの言葉に鷹揚に頷きながら、アインズは内心疑問を抱いた。
（珍しいな、何だろう？）
　大概の用事は〈伝言〉で事足りる。わざわざ会いに来るなんて、今までなかったことだ。扉が開け放たれ、見慣れた顔がやってきた。つるりとした卵型に穴が三つ、相変わらずシンプルな造形だ。
「Ｇｕｔｅｎ　ｔａｇ！　　アインズ様、我が神に置かれましては本日もご機嫌麗しゅう――」
「あぁ……挨拶も世辞も不要。何用だ、パンドラズ・アクター」
（こいつに喋らせると長いからなあ。早いところ終わらせよう）
　無駄にハイテンションな様子に軽く目眩を覚えながら問いかける。脳も血管も神経すらない身体をここまで蝕めるのはある種の才能ではなかろうか。パンドラをみるアルベドの冷ややかな視線は見ないふりをしておく。
「はい、私今日は未分類の棚の整理をしておりました。そこで少し気になるものを見つけたのです」
「ほう」
　アインズは大いに興味を惹かれた。宝物庫にはアインズ・ウール・ゴウンの、かつてのギルメンたちが買い集めた多種多様なアイテムが山ほど眠っている。その数は膨大であり、アインズをして把握しきれていないのが現状だ。まして宝物庫の管理者であるパンドラがわざわざ訪れたとなると、よほどのものなのであろう。もしかしたらアインズの知らない、ギルメンが作ったマジックアイテムや課金アイテムの類かもしれない。

（るし★ふぁーさんの悪戯とかだったら嫌だけどな……！）
　内心の興奮を抑えきれず、思わず机に身を乗り出す。果たして、パンドラが懐から取り出したのは――
「あ――」
「これは……何かしら」
「……綺麗」
　女性陣から歓声があがる机に置かれたのは手のひらサイズの宝玉。オレンジ色の半透明の輝きの中、四つの星を内包している。アインズの眼窩の灯が揺らいだ。
「音改様の姿で鑑定しても詳細がわからず、〝ｕｎｋｎｏｗｎ〟と表示されるのです！　アインズ様、これは一体何なのでしょう！」
　アイデンティティの崩壊とばかりにオーバーリアクションなパンドラを他所に。アインズは骨の指で宝玉を摘み上げると、光に透かすように持ち上げた。四つの赤い星がキラキラと瞬いている。
「このアイテムの名は〝四星球（スーシンチユウ）〟……私が……仲間たちと共に勝ち取った――そう、言うなれば勲章のようなものだ」
「勲章……ですか？」
「……うむ」
　アインズは懐かしそうに目を細める。脳裏に浮かぶは激戦の記憶。アインズ・ウール・ゴウンが一丸となって挑んだ、とある期間限定の世界級クエスト。
　それは知られざる戦いの物語。

オッス！　オラ悟空

「はあ……」
　サラリーマン、鈴木悟は重々しい溜め息を吐く。時計に目をやると時刻は既に午前零時を回っていた。上司に押し付けられた書類仕事をようやく終えたにも関わらず、彼の顔色は優れない。
「もうこの時間じゃ誰もいないかも……」
　帰り支度をする悟の頭は既にユグドラシルで一杯だった。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ――日本のとある企業が満を持して発表したＤＭＭＯＲＰＧ。悟はこのゲームにつま先から頭のてっぺんまでどっぷりと浸かっていた。親兄弟や友もなく、仕事に行くだけの日々。その全てを変えてくれたのだ。今ではユグドラシルなしの生活など考えられない。そして今日は――日付が変わってしまったが――ユグドラシル初のコラボイベント解禁日なのだ。噂では超高難易度イベらしい。逸る気持ちを抑えきれず、悟は家路へと急いだ。

◇◆◇

「え？　　あのトリニティが!!　　マジで!?」
「そうそう、確かな筋からの情報だよ」
「どうせあの掲示板だろ？」
「はぁ、こりゃあまた運営炎上するわな」
　灰色の待機空間を抜けた悟――モモンガは予想だにしない光景をみた。丑三つ時に近しい時間にも関わらず、円卓の間では仲間たちが異様な盛り上がりを見せていたのだ。
（やはり皆も楽しみにしてたのか）
　そんな何気ない当たり前が、何故か非常に嬉しかった。モモンガに気づいたギルメンから挨拶とアイコンが飛び交う。
「こんばんはー。皆さん、何の話をしてるんですか？」
「あ、モモンガさん！　お疲れー」
「こんばんはー」

「モモンガさん！　これ、これみてくださいよ！」
ギルメンのうち、特にモモンガと仲の良いペロロンチーノが興奮気味に何かをみせてくる。〈水晶の画面〉に映し出されたのは某巨大掲示板のスレッドだった。
「ええっと……〈光の戦士が倒せない　Ｐａｒｔ．５９〉……って５９!?」
驚きのあまりモニターを二度見する。つい数時間前に解禁されたイベントに対する反応にしては流れが早い。早すぎる。流石ユグドラシルといったところか。
「筋肉やばい」「至高天の織天使が瞬殺された」「あれは……悪魔だ」「俺はカカロットじゃねえよ。誰だよ……」「全身青タイツのおっさんが――」「子供二人組が――」「隻腕でカッコいい」「紫の道着だった」「父親を越えた存在らしい」「ウスノロって……」「俺らみたいな烏合の集じゃ無理だろ」
「……なんですかこれは」
モモンガは困惑のアイコンを飛ばす。控えめにいって阿鼻叫喚だった。最新のコメントを見る限り、未だこのイベントをクリアしたものはいないらしい。
「誰かもう挑戦しましたか？」
「いや、まだだよ」
「レギュレーションをみてよ」
モモンガは視界に表示される見慣れぬアイコンをタッチする。イベントの詳細が表示された。
期間限定コラボ企画〈世界級クエスト――金色の戦士を撃退せよ！〉
１．　イベント参加にはギルドに所属していること、また最低二人以上のギルドメンバーが必須である。
２．　同ギルドメンバーは何人でも同時に参加できるが、他ギルドとの同盟、共闘、並びにそれに属するものは認めない。
３．　ギルド長によるメンバーの選択、承認が必要である。
４．　期間内であれば何度でも対戦可能。また敗北時にはレベ

ルダウンやアイテムロストなどのデメリットは存在しない。
5．　対戦中、一度死亡したら蘇生アイテムを所持していない限り蘇生は不可能。
6．　戦闘記録の録画、録音はイベント難易度維持のため認めない。
7．　クリア報酬はイベント限定アイテム。
「これは……皆さんもしかして私を待っててくれたんですか！」
「モモンガさんほぼ毎日インしてるもんな」
「そうそう、どんなに遅くても絶対インすると信じてましたよ」
「待ちかねたぜい」
　モモンガは感動に打ち震える。やはりアインズ・ウール・ゴウンは最高だと再認識した。
「特にデメリットもないみたいですし、とりあえず一回挑戦してみませんか？」
「そうですね、ええと物理攻撃役、魔法攻撃役、防御役、支援役、回復役……後はアタッカーがもう一人ほしいところですね」
　現在いるメンバーはモモンガを含めて十一人。フルメンバーとは程遠いが、平日の深夜であることをかんがみれば充分すぎるほどだ。そんな時、システムメッセージが新たなギルメンの来訪を告げる。
　――たっち・みーさんがログインしました。
　ギルメンたちから歓声が上がる。これで戦力は申し分ないだろう。

◇◆◇

　モモンガが承諾を選択すると、瞬時に景色が入れ替わる。円卓の間から殺風景な荒野に転移した。目の前には一人の青年。黒髪に筋骨隆々の肉体、青いインナーに山吹色の胴着を身に着けている。青年はアインズ・ウール・ゴウンの面々を認識すると、朗らかに笑う。
「おお、おめえらがオラの相手か。来るのが遅えぞ、待ちくたびれちまった」
「……!!」

モモンガはもちろん、ギルメンたちは驚愕した。運営はよほど今回のコラボに本気と見える。未だ実装されていない感情に適応した表情の変化。おそらくは後々実装するためのテストも兼ねているのだろう。刻一刻と変化する表情はまるで本当に生きてるかのようだ。
「オラ孫悟空ってんだ、よろしくな！」
「は、はい。よろしくお願いします」
独特の雰囲気を持つ悟空にモモンガはつられて挨拶を返してしまう。本当に優秀なＡＩである。ヘロヘロやベルリバーが感嘆の音を漏らした。
「たっちさん、ドラゴンボールって知ってますか」
「申し訳ない、名前しか知りません。仮面ライダーでしたら昭和から平成まで全ライダー、全作品語れるのですが」
「いや、それ今はいいですから」
ペロロンチーノの問いにたっち・みーが生き生きと答え、間髪いれずウルベルトが突っ込みをいれる。残念ながら百数十年前の作品の知識を持ってるものは今のメンバーにはいなかった。漫画家志望のホワイトブリムならば知ってたかもしれないが、彼は既にログアウトしてしまった。前知識なしに戦ってみるしかない。
「じゃあ、さっそくやろうぜ。おめえら皆強そうだかんな、オラわくわくすっぞ！」
「ッ――」
瞬間、弛緩した空気はどこかに消え去った。悟空を中心に気が吹き荒れる。
「ぐあっ！」
自身にヘイトを集める特殊技術を使い、いつものようにタンク役に務めようとしたばりあぶる・たりすまんを激しい痛みが襲う。
「ばりあぶる・たりすまんさん!?」
それが悟空の拳が腹に叩き込まれたのだと自覚した時には、もう彼方へ吹き飛ばされていた。岩にしたたかに打ち付けられる。おそるべきはその威力。防御特化のばりあぶる・たりすまんのＨＰをたったの一撃で四分の一ほど削った。

「ハァァァ！」
「せいやっ」
「だりゃりゃりゃりゃ！」
たっち・みー、武人建御雷が素早くカバーリングにはいる。聖なる剣と建御雷七式の刃が悟空の左右から振るわれる。拳、腕、肘、膝、蹴り。連撃の応酬が悟空をその場に釘付けにする。その間に後衛はばりあぶる・たりすまんの回復、そしてアタッカーたちの能力上昇を行った。
「この距離なら！」
ペロロンチーノの太陽の弓が放たれ悟空を穿つ。フレンドリ・ファイアーは解禁されていないので遠慮なく仲間ごと狙える。続いてウルベルトやモモンガが高位階魔法を唱え、さらに追加ダメージを叩き込む。ばりあぶる・たりすまんも前線に復帰し、ベルリバーと共に悟空へ向かう。モモンガは笑顔のアイコンをぷにっと萌えへ浮かべた。
「確かに攻撃力は脅威ですが、これならいけそうですね」
ユグドラシルストーリーモードのラスボスや先日の始祖カインアベルと同じだ。今回も大した脅威ではないようだ。モモンガの言葉に、しかしぷにっと萌えは渋い声で唸る。
「うーん、おかしいですね」
「え？　何がですか」
「この程度の難易度ならば、あのトリニティが苦戦するはずがありません」
「……確かに」
底意地の悪い運営の初のコラボイベントだ。これで終わるとはなるほど、モモンガにもそう簡単には思えなかった。
「それにイベントのタイトル……金色の戦士……まさか――」
相手は黒髪だ、服装も金色とは呼べない。ぷにっと萌えははっとする。〈生命の精髄〉でみる敵のＨＰが半分を切った。
「皆さん、気をつけて！　相手はまだ――」
「ハァァァァァァ!!」
ぷにっと萌えの声を悟空の雄叫びが掻き消す。刹那、全てが変わっ

た。防御特化のばりあぶる・たりすまん、続いて相手の影より飛び出た弐式炎雷が消滅した。Ｄｅｌｅｔｅの文字だけ残して。ギルメンたちに動揺が走る。
「へへっ、おめえら強ええな！　オラも本気でいかせてもらうぞ」
逆立った金髪に深碧の瞳。黄金の気が荒れ狂う。スーパーサイヤ人、孫悟空はここからが本番とばかりに口元を吊り上げた。

◇◆◇

「はぁ、はぁ……」
たっち・みーが肩で息をする。既に他のギルメンは全て倒されてしまい、残りは自分ただ一人。彼が金色の戦士状態になってから、ほとんどダメージを与えられていない。対する自分のＨＰはもう後わずか。勝敗は決した。そんなたっちの心情を他所に、空中にふわりと浮かぶ悟空が気さくに声をかけてくる。
「おめえ、名前は？」
「……たっち・みー、です」
ここまで骨肉の死闘を演じて思うところがあったのだろう。たっち・みーはＡＩとわかっていてもつい返事を返してしまった。そんな彼に悟空は豪快な笑みを浮かべる。
「そっか！　たっち・みー、みんな強かったけどおめえは特に強かったぞ！」
「それは……どうも」
どうやら皮肉ではなく、本当に褒めてくれているらしい。悟空は半身になり両手首を合わせ腰を落とす。他のギルメンたちを複数、一度に屠ったあの特殊技術がくる。たっち・みーは剣を最上段に構えた。せめて一矢報いたい。
「また絶対やろうな！　かぁ、めぇ、はぁ、めぇ――」
「次元（ワールド）――」
光が収束する。やがて臨界点に達した輝きが一気に放たれた。
「――波ぁあああああ!!」

「――断絶(ブレイク)!!」

超弩級の特殊技術がぶつかり合う。巻き上がる土煙の向こう、最後に立っていたのは金色の戦士のみ。

こうしてアインズ・ウール・ゴウンの初回の挑戦は敗北という形で終わった。

2

明晩、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーは円卓の間で反省会を開いていた。雰囲気は重苦しいというより、むしろ明るい。手応えのあるクエスト登場の歓喜の方が優っていた。皆、和気あいあいと昨夜の一戦を検討している。

「いやあ、強かったのなんの!!」

「そんなに強かったのー?」

「あれはヤバイ、マジヤバイ」

「ほとんどチートですよあんなの!!」

昨晩の戦闘には未参加だったぶくぶく茶釜ややまいこといった女性陣に、如何に相手が難敵だったかペロロンチーノやヘロヘロが力説する。

「ムービーはないの?」

「私も録画したかったんですがねえ」

餡ころもっちもちの言葉にぷにっと萌えが力なく首を振る。彼は戦闘時、仲間たちが次々に屠られていく中、何とか戦闘データを記録しようと外部ツールを起動した。しかし――

「謎のエラーが起きてしまってね」

ぷにっと萌えは肩をすくめる。孫悟空が「サンキュー、ピッコロ!」と発言していたからその辺りも運営はしっかり対策を施していたようだ。

「モモンガさん、今日ももちろん行くだろ?」

「そうです、昨晩の雪辱を晴らしませんと」

ほとんど良いところなしでやられた弐式炎雷やウルベルトが息巻く。同意しかけたモモンガに、待ったをかけたのはたっち・みーだった。

「待ってください、このまま無策で行っても結果は変わらないでしょう」

「それは聞き捨てなりませんね」

ウルベルトがたっち・みーに食ってかかる。また始まったと他のギ

ルメンから溜め息が溢れた。
「昨日よりもこちらの人数は多いんですよ？　試してみるべきでは？」
「相手の能力を分析してからでも遅くはないはずですが？」
見えない火花がバチバチと散る。そんな二人を微笑ましく思いながらモモンガはある程度のところで仲裁に入る。
「ギルド長！」
「モモンガさんはどう思われますか！」
「はい、では皆さんいつものように。多数決取りますよー」
揉めた際のルールに従い、皆ユグドラシル硬貨を取り出した。
「たっちさんが旧金貨、ウルベルトさんが新金貨でお願いします」
結果として一行は再び金色の戦士に挑むこととなったのだが準備不足も甚だしい。勝敗は語るまでもないだろう。

◇◆◇

それから一週間が経過した。いよいよ明日がイベント最終日。これまでの戦績は全戦全敗だ。非常に不名誉ではあるが、他のギルドも同じ結果なので運営は絶賛炎上中である。何故こんなクリア不可能なクエストを敢行したのかと。だが上位ギルドは如何にしてこの難業に挑むか日々戦略を練っていた。アインズ・ウール・ゴウンもまた例に漏れず最後の作戦会議中である。
「では、これまで得た情報を整理していきましょうか。ぷにっと萌えさん、お願いします」
「はい」
ギルド長モモンガが、アインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔明ことぷにっと萌えに説明を一任する。いい加減負けが込み、笑っていられなくなったギルメンたちの表情は真剣そのもの。それはモモンガとて同じだった。いくらレイドボス級といえど、連戦連敗で悔しくないわけがない。
「まずは相手の情報から。孫悟空――言わずと知れたドラゴンボール

の主人公ですね」
一同が頷く。彼を知り、己を知らば百戦危うからず――智者の言葉通り、彼らは過去を学んだ。電子書籍化された原作の数冊をホワイトブリムが所持していたのは幸運だった。そこからお金を出し合い、ＤＶＤやＢｌｕ－ｒａｙといったもはや過去の遺物と言っても差し支えない記録媒体を漁った。原作、ドラゴンボールＺ、ドラゴンボールＧＴ、ドラゴンボール超、映画版などなど。どこかに孫悟空の弱点はないかと隅から隅まで読み込んだ。
たっち・みーなぞすっかり初心を忘れハマってしまい、原作を揃えるのはもちろん、スーパーサイヤ人的な気のエフェクトを購入したほどだ。過去の名作を世に広めるという観点からみれば、このコラボは大成功といえるだろう。難易度が破滅的に狂っているという最大の欠点を除けば、だが。
「相手の強さはこちらの人数に依存するようです」
初日に十二人。次は二十五人、その次は十八人、そして三十四人と。毎回異なる人数で挑むことである程度の法則性が掴めてきた。おそらくギルドメンバー数による不公平を極力排除したいのだろう。そして何度挑んでも相手は孫悟空で固定だ。他のギルドも〝ベジータ〟や〝孫悟飯〟等、同様に固定されているようだ。〝ブロリー〟を引き当てたトリニティなどは見るも無残な姿である。新しい物語が出る度に強くなっていく〝孫悟空〟とどちらがより脅威であるかは意見が分かれるところだ。
「基本的には黒髪のノーマル状態ですね」
「〈かめはめ波〉や〈界王拳〉、〈瞬間移動〉など厄介な技が多いですがまだ対処できます。問題は――」
「スーパーサイヤ人ですね」
ホワイトブリムが発言する。ＨＰが半減すると使用してくるスーパーサイヤ人。この状態を許したら最後、ワールドチャンピオンであるたっち・みー以外ほとんど満足にダメージを与えられない。防御特化であるばりあぶる・たりすまんやぶくぶく茶釜ですら数撃と耐えきれず蒸発してしまう。ノーマル状態とは桁違いの攻撃力、防御力、俊

敏性。この高い壁を突き崩そうと様々な策を講じた。遠距離からの波状攻撃、超位魔法を主軸とした高火力、超位魔法からの不動明王コンボ、ｅｔｃ。いずれも惜しいところまでいくのだが、あと一歩が足りない。頭を悩ませる一同を見渡し、ぷにっと萌えは不敵な笑みを浮かべる。

「私にいい考えがあります」

◇◆◇

「お、きたな！」

もう何度目かも分からない会合。来訪者たちに気づいた孫悟空は両手を組み大きく伸びをする。その後ろには和洋中問わず、たくさんの料理の空の器が積まれていた。アインズ・ウール・ゴウンの面々を待つ間に食事をとっていた――という設定のようだ。特に能力上昇がついた様子もない。このコラボイベントへの運営の力の入りようが窺える。モモンガにはまるで孫悟空が本当に生きてそこにいるかのように感じられた。悟空がモモンガに気さくに話しかけてくる。

「おっすモモンガ！　今日はみんなできたんか。ええっと、なんつったっけ……あい、あいすーうるごん？」

「アインズ・ウール・ゴウンですよ」

「そうそう、そのアインズなんちゃら！　おめえら毎回面白え闘い見せてくれっからよ！　オラもう待ちきれねえよ」

「ははは……期待に添えるかわかりませんが」

これがイベント〝金色の戦士を撃退せよ〟の難しいところだ。孫悟空は非常に高度なＡＩが備わっている様子で、何と一度見た戦法やコンボは次に闘うときにはもう通用しない。経験値が蓄積していくのだ。魔法詠唱者（マジック・キャスター）であるモモンガにはパッとしないが、たっち・みーたち前衛職にしてみれば違いが一目瞭然らしい。動きが一週間前よりも格段に良くなっているという。ＡＩが孫悟空らしい動きを学習しているのだろうか。

「私たちもいつまでも負けっぱなしじゃないですからね？　今夜は

――アインズ・ウール・ゴウン全員でお相手します」
四十一人全員が各々の武器を構える。呼応するように孫悟空も両手を広げ構えを取る。
「いくぞ、孫悟空!!」
「へへっ、こい!!」
「はぁぁぁぁぁ!!」
「でやぁぁぁぁ!!」
前衛たちが一斉に孫悟空へ飛びかかり、支援職や魔法職のギルメンたちは能力上昇系の魔法を詠唱しながら後方へ跳びのく。瞬間、辺りに霧が立ち込めた。正確には悟空を含めアインズ・ウール・ゴウンが隔離空間へ囚われる。
「へっ――!?」
孫悟空は初めてみる世界級アイテムの効果に驚愕した。その隙をつき、建御雷やベルリバーが斬りかかる。返す拳は両手に盾を構えたぶくぶく茶釜が受け止める。どんなに強くてもユグドラシルというゲーム内システムは適応される。ヘイト管理を間違わなければノーマル状態の攻撃を受け止めるのは容易い。巧みに霧に紛れながらヒットアンドアウェイで悟空にダメージを与えていく。
「でりゃあ!」
無論、悟空もやられっぱなしではない。世界級アイテムと課金アイテムを駆使し最大限気配を遮断したはずの前衛たちに的確に拳や蹴りを当てていく。ドラゴンボール原作にもあった〝気〟を探っているのだろう。
「たりすまんさん、茶釜さんのカバーに入ってください！　やまいこさん、前に出過ぎないで！　回復を優先してください」
ぷにっと萌えは前衛たちにチャットを飛ばす。〈生命精髄〉を唱えつつ、モモンガは自身の腕につけた銀の腕輪を見やる。同じものをぷにっと萌えやウルベルト・アレイン・オードル、タブラ・スマラグディナなど信仰系を除く魔法詠唱者たちが装備している。今回の作戦の鍵となるアイテムだ。
「上手くいくでしょうか……？」

「大丈夫ですよ、俺たちならいけますって」
「ペロロンチーノさん」
　思わずモモンガの口をつく不安を爆撃の翼王が払拭する。彼は縦横無尽に空を飛び回り、悟空へと矢の雨を降らせていた。続いてモモンガの視線は白銀の聖騎士へと向けられる。彼は前衛の攻撃に加わらず、ちょうど前衛と後衛の中間あたりで剣と盾とを構えていた。小声でぶつぶつと「大丈夫……お小遣いの範囲内なら怒られない……はず」などと呟いている。
「そろそろか……るし★ふぁーさん！　お願いします！」
「はいはーい」
　ぷにっと萌えの指示に従い、ゴーレムクラフターのるし★ふぁーが悟空へと迫る。そしておもむろに大声で、
「あっ、魔人ブウ!?」
「いっ――!?」
　驚いた悟空が思わず指さされた後方を振り返る。もちろんそこには何もなく、
「ポチッとな！」
「ぐあっ……！」
　るし★ふぁーが指を鳴らすと虚空から駆動音を響かせゴーレムが現れた。岩を思わせる巨大な腕が悟空を締め付ける。
「ふっふっふ、ちょろまかした超希少金属を使った特別製ゴーレム！
　全てはこの日のために!!」
「おい、るし★ふぁー!?　今なんて言った!?」
「るし★ふぁーさん、後でお話しがあります」
　仲間たちの非難轟々など物ともせず、るし★ふぁーが高らかに叫ぶ。
「今です!!」
　釈然としないものを感じながらも魔法詠唱者たちは〈集団・転移〉、孫悟空の直上へ飛ぶ。
「はぁあああ!!」
　悟空の黒髪が点滅し、今にもスーパーサイヤ人に変化しそうだ。だ

がこちらの方が一手早い。山羊頭の悪魔が外套を翻し、叫ぶ。
「唸れ！　我が秘儀！　降りよ、究極の災厄！　絶望と憎悪の涙を溢せ！――〈大厄災（グランド・カタストロフ）〉!!」
「ウルベルトさんほどではないが私も――〈失墜する天空（フォールンダウン）〉」
「〈魔法三重最強化（トリプレットマキシマイズマジック）・現実断（リアリティ・スラッシュ）〉!!」
蛸の錬金術師や死の支配者が後に続く。魔法詠唱者たちは己が持つ最大火力を眼下へ叩き込んだ。
「〈次元断切〉」
魔法職に負けじとたっち・みーが口火を切った。ワールドチャンピオンの超弩級特殊技術が火を吹く。
「へっ、俺らも負けてられねえな！　いくぞ――〈不動明王撃〉!!」
ぷにっと萌えの立てた作戦は至極単純なものだった。孫悟空のＨＰを彼がスーパーサイヤ人になるギリギリまで削り、そこから超位魔法や高位階魔法など最大火力でコンボを決めて一気に削り切る。そう、スーパーサイヤ人が難敵というのなら、変化する前に倒せばいいのだ。アニメのとある一場面。悟空が光線銃でいとも容易くやられたシーンを参考にした。万一倒しきれずとも、こちらが圧倒的に優位を保てるはずだ。
「やったか!?」
「弟黙れ！　それフラグ!?」
そのはずだった。現に〈生命精髄〉でみる孫悟空のＨＰは三割を切っている。〈瞬間移動〉を警戒し、既に〈転移遅延〉も詠唱済みだ。万全を期すために一度魔法職を退がらせるべきか。
「皆さん、最大限警戒しつつ一旦後退しま――」
「っ!!?」
指揮を取るため最後尾へと陣取っていたはずのぷにっと萌え。彼の腹を一条の閃光が貫いた。否、それは閃光と見紛う速度で繰り出された拳だった。バチバチと帯電する気の奔流は今までのスーパーサイヤ人の比ではない。
「おめえら本当に強え！　オラ嬉しいぞ！」
悟空は逆立った金髪を揺らしながら心底楽しそうに笑った。

「続けようぜ！　まだまだこんなもんじゃねえんだろ？」
「……これからが本当の地獄だ」
スーパーサイヤ人２となった孫悟空が構えをとる。対するアインズ・ウール・ゴウンの面々はるし★ふぁーの軽口に同意せざるを得なかった。